終わりの静けさ

西部中・3　前橋　青空

ラケットが泣いていた
最後の一本を打ち終えたあと
風が観客のふりをして
静かに拍手を送っていた

交わしたサイン
すれ違う視線
一瞬のラリーに
あの何百日の「本気」が宿っていた

声を張った
限界まで走った
でもネットの向こう側には
一歩届かない距離があった

ペアの手が
そっと肩に触れた
その温度が
言葉よりも先に
「ありがとう」と伝えてくる

振り返れば
雨の中のボレー練習
誰もいない朝のコートで発した「おはよう」
怒られて泣いた日も
笑って崩れ落ちた日も
ぜんぶ今日につながっていた

「もう少しで届いたのに」
そう何度も心の中でリプレイする
何度も何度も
終わったはずのラリーが
胸の中では終わらない

試合が終わり
音が消えたコートに
僕らの影だけが
長く長く伸びていた
ラケットを持つ手が空を切り
負けたという事実と並んで立っていた

これは終わりか？
それとも始まりか？
問いかけるたび静けさが答える
「君たちは本気だった」と

7・9